

誰よりも、何よりも

（ヨハネ二一・一五〜二一）

「愛は惜しみなく与う」と言ったのはロシアの文豪、トルストイだが、この言葉にインスパイアされ、愛についての評論をまとめたのは有島武郎。彼は件の言葉に下の句をつけて言う。「愛の表現は惜しみなく与えるだろう。しかし、愛の本体は惜しみなく奪うものだ。」と。確かにそういう側面もある。愛は確かにその対象に惜しみなく奉仕し、与えるものだが、それによつて愛する者と愛される者には排他的な関係を形成する。そう考えれば愛するということは確かに「奪う」ことでもあるのだ。

閑話休題。今朝の箇所においてイエスはペテロに「私を愛するか」と問うのであるが、それは比較級で書かれている。日本語では「この人たち以上に」と書かれているが英文では *Do you love me more than these?* と曖昧である。そこで以下、イエスが求めた愛はどのようなものであったのか。二つの可能性を考え、更にその具体的な表現は何かということに思いをはせたい。

一、「誰よりも」

まずは主要な日本語訳すべてがとっている訳文で考えてみたい。つまり「あなたは、この人たち以上に、わたしを愛するか」である。この人たちとは当然イエスとペテロと食事を共にしていた弟子たちである。イエスは大胆にも「ペテロよ、お前はここにいるお前の仲間が私を愛する以上に、わたしを愛するか」と迫ったのである。しかしこの言葉はペテロにとつては実に酷な言葉であった。というのも彼は師であるイエスの受難の直前に、「あなたのためにはいのちを捨てます（ヨハネ一三・三七）」と言い、「たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません（マルコ一四・二九）」と豪語していたからである。しかし現実はいエスの予告の通り、彼は完全にイエスを捨てた。イエスを愛するのではなく、自分のいのちを愛し、惜しんだのだ。そんな彼にイエスは二度、三度と「私を愛するか」と再献身を迫る。苦しいほどの愛の迫りだ。ペテロにとつてこれは気まずいことこの上なく、穴があつたら入りた気分であつたらうと容易に推察できる。しかしイエスは徹底的に「誰よりも深く私を愛するか」と迫り、それによつてペテロの脆弱な心を取り扱い、愛のことばを告白させたのである。

二、「何よりも」

しかし冒頭に述べた通り、この箇所にはもう一つの解釈の可能性がある。それは「この人たち」と訳されるギリシャ語の「トウートーン」を「これらのものよりも」と理解する読み方であり、文法的には十分に成立する訳である。また聖書においては愛が「もの」に向かう用例はヨハネ三・一六などにもあるように不自然なものではない。ではイエスとペテロの視線の中にあつたモノとは何だろう。網、船、魚、そういう類いのものであつた。更に言えば、この事件が起こつた場所はテベリヤの湖畔、即ちガリラヤ湖であつた。つまりこの場所は彼らのふるさとだつたのだ。故郷に帰りどういふわけか魚を取る漁師（一）に戻つていたペテロにイエスは「ペテロ、お前はまた網や船、そして故郷の暖かさといったこの世のものを愛しているのか。これらのもの以上に私を愛し、私の使命に生きるのか」と迫つたのである。とはいへこう解したところでイエスの迫りは変わらず痛いものであつた。愛は排他的な原理である。イエスとふるさと、イエスとお金、イエスと生業といった具合に二股をかけることは許されない。愛するということは優先順位が一番その存在にささげることであり、イエス執拗なまでにペテロにそれを要求されたのである。

* * *

イエスがペテロに求めた愛はこのように「誰よりも」「何よりも」の愛、常にイエスを最優先にするある意味排他的な愛であつた。しかもその愛が確認されたときに主がペテロに語られた言葉は現世の祝福とは正反対の捕縛と殉教の予告であつた。その上でなお主はペテロに服従を求められた。何と厳しいことかと思う。その時ペテロの視界にかの主が愛された弟子が入ってきた。間髪入れずに彼は「主よ。この人はどうですか」とつぶやく。だがイエスはこの問いを一蹴する。二二節は原文では「お前にそれが何なのだ」というくらい素朴で強いことばだ。イエスが求めたのはどこまでもイエスとペテロの一対一の関係、排他的かつ強靱な愛の関係の確立だつた。他人の未来などどうでもいい。大切なのはイエスとの *F to F, One on One* の関係だ。誰よりも何よりもイエスを愛し、その表れとしてイエスに従っていくこと。それだけである。人生はオンリーワンなのだ。比較する必要などない。だが「誰よりも、何よりも私を愛するか」という問いは皆に向けられたもの。御霊の助けにより、執拗なまでの主の問いかけに常に誠実に応答する者でありたい。